

W
W
W
W

林
芙
美
子
集

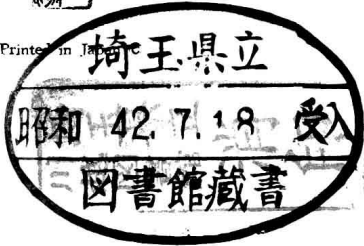
日
本
文
學
全
集

57

新
潮
社



Printed in Japan



日本文藝全集 57 林芙美子集

昭和三十六年八月二十日発行
昭和四十一年十二月十二日十七刷

著者 林 芙美子

編者 十 返 鏡

発行者 佐 藤 亮 一

印刷者 草 刈 親 雄

発行人 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(20)二二三 振替東京六一

印刷所・中央情版印刷株式会社
製 本・共同 製 本 所

本文用紙・十条製紙株式会社
箱貼・カバ・特種製紙株式会社

表紙布地・望月株式会社
扉見返

定価 三三〇円

(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

目次

放浪記

五

風琴と魚の町

一〇九

清貧の書

一三九

牡蠣

一五三

泣虫小僧

一八二

晩菊

二三三

浮雲

二四九

注解

五三

年譜

五三

解説

五三

十返肇

五三

林芙美子集

放浪記（第一部）

放浪記以前

私は北九州の或る小学校で、こんな歌を習った事があった。

更けゆく秋の夜 旅の空の
佗しき思いに 一人なやむ

恋いしや古里 なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。

父は四国の伊予の人間で、太物の行商人であった。母は、九州の桜島の温泉宿の娘である。母は他国者と一緒になったというので、鹿児島を追放されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口県の下関という処であった。私が生れたのはその下関の町である。——故

郷に入れられなかった両親を持つ私は、したがって旅が古里であった。それ故、宿命的に旅人である私は、この恋いしや古里の歌を、随分佗しい気持ちで習ったものであった。——八つの時、私の幼い人生にも、暴風が吹きつけてきたのだ。若松で、呉服物の糶売をして、かなりの財産をつくっていた父は、長崎の沖の天草から逃げて来た浜という芸者を家に入れていた。雪の降る旧正月を最後として、私の母は、八つの私を連れて父の家を出てしまったのだ。若松というところは、渡し船に乗らなければ行けないところだと覚えている。

今の私の父は養父である。このひとは岡山の人間で、実直過ぎるほどの小心さと、アブノーマルな山ツ氣とで、人生の半分は苦勞で埋れていた人だ。私は母の連れ子になって、此の父と一緒にになると、ほとんど住家というものを持たないで暮して来た。どこへ行っても木賃宿ばかりの生活だった。「お父つあんは、家を好かんとじゃ、道具が好かんとじゃ……」母は私にいつもこんなことを言っていた。そこで、人生いたるところ木賃宿ばかりの思い出を持って、私は美しい山河

も知らないで、義父と母に連れられて、九州一円を転
転と行商をしてまわっていたのである。私をはじめ
小学校へはいったのは長崎であった。ぎ、つ、こ、く、屋とい
う木賃宿から、その頃流行のモスリン改良服というの
をきせられて、南京町近くの小学校へ通って行った。
それを振り出しにして、佐世保、久留米、下関、門司、
戸畑、折尾と言った順に、四年の間に、七度も学校を
かわって、私には親しい友達が一人も出来なかった。
「お父つあん、俺アもう、学校さ行きとうなな、バイ
……」

せっぱつまつた思いで、私は小学校をやめてしまっ
たのだ。私は学校へ行くのが厭になつていたので。そ
れは丁度、直方のぶかたの炭坑町に住んでいた私の十二の時
であつたらう。「ふうちゃんにも、何か売らせましよう
たいなあ……」遊ばせては、モ、ッ、タイ、ナイ、年頃であつ
た。私は学校をやめて行商をするようになったのだ。

*

直方の町は明けても暮れても煤すすけて暗い空であつ
た。砂で漉こした鉄分の多い水で舌がよれるような町で

あつた。大正町の馬屋うまやという木賃宿に落ちついたのが
七月で、父達は相変らず、私を宿に置きっぱなしにす
ると、荷車を借りて、メリヤス類、足袋、新モス、腹
巻、そういつた物を行李こぶりに入れて、母が後押しして炭坑
や陶器製造所へ行商に行っていた。

私には初めての見知らぬ土地であつた。私は三銭の
小遣いを貰い、それを兵児帯へいぢおびに巻いて、毎日町に遊び
に出ていた。門司のように活気のある街でもない。長
崎のように美しい街でもない。佐世保のように女のひ
とが美しい町でもなかった。骸炭がいかんのザクザクした道を
はさんで、煤けた軒が不透明なあくびをしているよう
な町だつた。駄菓子屋、うどんや、屑屋、貸布団屋、
まるで荷物列車のような町だ。その店先きには、町を
歩いている女とは正反対の、これは又不健康な女達
が、尖つた目をして歩いていた。七月の暑い陽ざしの
下を通る女は、汚れた腰巻と、袖のない襦袢じゆばんきりであ
る。夕方になると、シャベルを持った女や、空のモッ
コをぶらさげた女の群が、三々五々しゃべくりながら
長屋へ帰って行った。

流行歌のおいとこそうだよの唄が流行はやっていた。

私の三銭の小遣は、双児美人の豆本とか、氷饅頭のよ
うなもので消えていた。——問もなく私は小学校へ行
くかわりに、須崎町の粟おこし工場に、日給二十三銭
で通った。その頃、箆ざるをさげて買いに行っていた米
が、たしか十八銭だったと覚えていた。夜は近所の貸
本屋から、腕の喜三郎や横紙破りの福島正則、不如帰、
なげぬ神、渦巻などを借りて読んだ。そうした物語の
中から何を教ったのだろうか？ メデタシ、メデタシ
の好きな、虫のいゝ空想と、ヒロイズムとセンチメン
タリズムが、海綿のような私の頭をひたしてしまっ
た。私の周囲は朝から晩まで金の話である。私の唯一
の理想は、女成金になりたいという事だった。雨が何
日も降り続いて、父の借りた荷車が雨にさらされる
と、朝も晩も、かぼちゃ飯で、茶碗を持つのがほと
うに淋しかった。

*

この木賃宿には、通称シンケイ（神経）と呼んでい
る、坑夫上りの狂人が居て、このひとはダイナマイト

で飛ばされて馬鹿になった人だと宿の人が言ってい
た。毎朝早く、町の女達と一緒にトロッコを押しに出
かけて行く気立ての優しい狂人である。私はこのシン
ケイによく虱みを取ってもらったものだ。彼は後で支柱
夫に出世したけれど、外に、島根の方から流れて来て
いる祭文語りの義眼ぎがんの男や、夫婦者の坑夫が二組、ま
むし酒さけを売るテキヤ、親指のない淫売婦、サーカスよ
りも面白い集団であった。

「トロッコで圧おさされて指を取った言いよるけど、嘘
ばんだ、誰たれぞに切られたつとじゃろ……」

馬屋のお上さんは、片目で笑いながら母にこう言っ
ていたものだ。或る日、この指のない淫売婦と私は風
呂に行った。ドロドロの苔こけむした暗い風呂場だった。
この女は、腹をぐるりと一巻きにして、臍へそのところ
に朱い舌を出した蛇の文身いれずみをしていた。私は九州で初め
てこんな凄い女を見た。私は子供だったから、しみじ
み正視してこの薄青いこわい蛇の文身を見ていたもの
だ。

木賃宿に泊っている夫婦者は、たいいてい自炊で、自炊
でない者達も、米を買って来て炊たいてもらっていた。

ほら、くのように焼けた暑い直方の町角に、そのころカチュウシヤの絵看板が立つようになった。異人娘が、頭から毛布をかぶって、雪の降っている停車場で、汽車の窓を叩いている図である。すると間もなく、頭の真ん中を二つに分けたカチュウシヤの髪が流行つて来た。

カチュウシヤ可愛いや 別れの辛さ

せめて淡雪 とけぬ間に

神に願いを ラ、かけましようか。

なつかしい唄である。この炭坑街にまたよく間に、このカチュウシヤの唄は流行してしまった。ロシヤ女の純情な恋愛はよくわからなかったけれど、それでも、私は映画を見て来ると、非常にロマンチックな少女になつてしまったのだ。浮かれ節(浪花節)より他に芝居小屋に連れて行ってもらえなかった私が、たった一人で隠れてカチュウシヤの映画を毎日見に行ったものであった。当分は、カチュウシヤで夢見心地であった。石油を買いに行く道の、白い夾竹桃(まじゅうもくとう)の咲く広場で、町

の子供達とカチュウシヤごっこや、炭坑ごっこをして遊んだりもした。炭坑ごっこの遊びは、女の子はトロツコを押す真似をしたり、男の子は炭坑節を唄いながら土をほじくって行くしぐさである。

*

そのころの私はとても元気な子供だった。

一カ月ばかり勤めていた粟おこし工場の二十三銭也にもさよならをすると、私は父が仕入れて来た、扇子や化粧品を単色の風呂敷に背負つて、遠賀川を渡り隧道を越して、炭坑の社宅や坑夫小屋に行商して歩くようになった。炭坑には、色々な行商人が這入り込んでいるのだ。

「暑うしてたまらんなア。」この頃私には、こうして親しく言葉をかける相棒が二人ばかりあった。「松ちゃん」これは香月から歩いて来る駄菓子屋で、可愛い十五の少女であったが、間もなく「青島」へ芸者に売られて行つてしまった。「ひろちゃん」干物屋の売りで、十三の少年だけれど、彼の理想は、一人前の坑夫になりたい事だった。酒が呑めて、ツルハシを一寸高

く振りかざせば人が驚くし、町の連鎖劇^{*}は無料でみられるし、月の出た遠賀川のほとりを、私はこのひろちゃんたちの話を聞きながら帰ったものだった。——その頃よく均一という言葉が流行っていたけれど、私の扇子も均一の十銭で、鯉の絵や、七福神、富士山の絵が描いてある。骨はがんじょうな竹が七本ばかりついている。毎日平均二十本位はかたづけっていた。緑色のペンキのはげた社宅の細君よりも、坑夫長屋をまわった方がはるかに扇子はさばけていった。外にラッパ長屋と言って、一棟に十家族も住んでいる鮮人長屋もあった。アンペラの畳の上には玉葱^{たまねぎ}をむいたような子供達が、裸で重なりあつて遊んでいた。

烈々とした空の下には、掘りかえした土が口を開けて、雷のように遠くではトロッコの流れる音が聞えている。昼食時になると、蟻の塔のように材木を組みわした暗い坑道口から、泡のように湧いて出る坑夫達を待つて、幼い私はあっちこち扇子を売りに歩いた。坑夫達の汗は水ではなくて、もう黒い飴^{あめ}のようであった。今、自分達が掘りかえした石炭土の上にゴロリと横になると、バクバクまるで金魚のように空気を吸つ

てよく眠った。まるでゴリラの群のようだった。

そうしてこの静かな景色の中に動いているものと言え、棟^{むね}を流れて行く昔風なモッコである。昼食が終るとあっちからもこっちからもカチュウシヤの唄が流れて来ている。やがて夕顔の花のようなカンテラの灯が、薄い光で地を這って行くと、けたままし警笛^{サイレン}の音だ。国を出るときや玉の肌……何でも無い唄声ではあるけれど、もうもうとした石炭土の山を見ていると何だか子供心にも切ないものがあつた。

扇子が売れなくなると、私は一つ一銭のアンパンを売り歩くようになった。炭坑まで小一里の道程を、よく休み休み私はアンパンをつまみ食いして行ったものだ。父はその頃、商売上の事から坑夫と喧嘩をして頭をグルグル手拭で巻いて宿にくすぼっていた。母は多賀神社のそばでバナ、の露店を開いていた。無数に駅からなだれて来る者は、坑夫の群である。一山いくらのバナ、は割によく売れて行った。アンパンを売りさばいて母のそばへ籠を置くと、私はよく多賀神社へ遊びに行った。そして大勢の女や男達と一緒に、私も馬

の銅像に祈願をこめた。いゝ事がありますように。——多賀さんの祭には、きまつて雨が降る。多くの露店商人達は、駄のひさしや、多賀さんの境内を行ったり来たりして雨空を見上げていたものだった。

十月になって、炭坑やまにストライキがあった。街中は、ジンと鼻をつまんだように静かになると、炭坑から来る坑夫達だけが殺氣だつて活氣があつた。ストライキ、さりとほ辛いね。私はこんな唄も覚えた。炭坑のストライキは、始終の事で坑夫達はさつさと他の炭坑へ流れて行くのだそうだ。そのたびに、町の商人との取引は抹殺されてしまうので、めつたに坑夫達には品物を貸して帰れなかつた、それでも坑夫相手の商売は、てつとり早くてユカイだと商人達は言っていた。

*

「あんたも、四十過ぎとんなはつとじゃけん、少しは身を入れてくれんな、仕様がなかもんなた……」

私は豆ランプの灯のかげで、一生懸命探偵小説のジゴマを読んでいた。裾にさしあつて寝ている母が父に

何時もこうつぶやいていた。外はながい雨である。

「一軒、家ちゆうもんを、定めんとあんた、こぎやんに時に困るけんな。」

「ほんにヤカマシかな。」

父が小声で囁鳴ると、あとは又雨の音だった。——そのころ、指の無い淫売婦だけは、いつも元気で酒を呑んでいた。

「戦争でも始まるとよかな。」

この淫売婦の持論はいつも戦争の話だった。この世の中が、ひっくりかえるようになるといふと言つた。

炭坑にうんと金が流れて来るといふと言つていた。

「あんたは、ほんまによか生れつきな」母にこう言われると、指の無い淫売婦は、「小母つきさんまで、そぎやん思うとんなはると……」彼女は窓から何か投げては淋しそうに笑つていた。二十五だと言つていたが、労働者上りらしいプチプチした若さを持つていた。

十一月の声のかゝる時であつた。

黒崎からの帰り道、父と母と私は、大声で話しながら、軽い荷車を引いて、暗い遠賀川の堤防を歩いてい

た。

「お母さんも、お前も車へ乗れや、まだまだ遠いけに、歩くのはしんどいぞ……」

母と私は、荷車の上に乗っかると、父は元気のいい声で唄いながら私達を引いて歩いた。

秋になると、星が幾つも流れて行く。もうじき、街の入口である。後の方から、「おっさんよっ！」と呼ぶ声があった。渡り歩きの坑夫が呼んでいるらしかった。父は荷車を止めて「何ぞ！」と呼応した。二人の坑夫が這いながらついて来た。二日も食わないのだと言う。逃げて来たのかと父が聞いていた。二人共鮮人であった。折尾まで行くのだから、金を貸してくれと何度も頭をさげた。父は沈黙して五十銭銀貨を二枚出すと、一人ずつに握らせてやった。堤の上を冷たい風が吹いて行く。茫々とした二人の鮮人の頭の上に星が光っていて、妙にガクガク私たちは慄えていたが、二人共一円もらうと、私達の車の後を押して長い事沈黙って町までついて来た。

しばらくして父は祖父が死んだので、岡山へ田地を売りに帰って行った。少し資本をこしらえて来て、唐

津物を糶売りをしてみたい、これが唯一の目的であった。何によらず炭坑街で、てっとり早く売れるものは、食物である。母のバナ、と、私のアンパンは、雨が降りさえしなければ、二人の食べる位は売れて行った。馬屋の払いは月二円二十銭で、今は母も家を一軒借りるより此方が楽だと言っていた。だが、どこまで行ってもみじめすぎる私達である。秋になると、神経痛で、母は何日も商売を休むし、父は田地を売ってたった四十円の金しか持って来なかった。父はその金で、唐津焼を仕入れると、佐世保へ一人で働きに行ってしまった。

「じき二人は呼ぶけんのう……」

こう言って、父は陽に焼けた厚司一枚で汽車に乗って行った。私は一日も休めないアンパンの行商である。雨が降ると、直方の街中を軒並にアンパンを売って歩いた。

このころの思い出は一生忘れることは出来ないのだ。私には、商売は一寸も苦痛ではなかった。一軒一軒歩いて行くと、五銭、二銭、三銭という風に、私のこしらえた財布には金がたまっている。そして私は、

自分がどんなに商売上手であるかを母に賞めてもらうのが楽しみであった。私は二カ月もアンパンを売って母と暮した。或る日、街から帰ると、美しい、ヒワ色の兵児帯を母が縫っていた。

「どぎゃんしたと？」

私は驚異の目をみはったものだ。四国のお父つあんから送って来たのだと母は言っていた。私はなぜか胸が鳴っていた。間もなく、呼びに帰って来た義父と一緒に、私達三人は、直方を引きあげて、折尾行き汽車に乗った。毎日あの道を歩いたのだ。汽車が遠賀川の鉄橋を越すと、堤にそった白い路が暮れそめていて、私の目に悲しくうつるのであった。白帆が一ツ川上へ登っている、なつかしい景色である、汽車の中では、金鎖や、指輪や、風船、絵本などを売る商人が、長い事しゃべっていた。父は赤い硝子玉のはいった指輪を私に買ってくれたりした。

(十二月×日)

さいはての駅に下り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

雪が降っている。私はこの啄木の歌を偶つと思ひ浮べながら、郷愁のようなものを感じていた。便所の窓を明けると、夕方の門灯が薄明るくついでいて、むかし信州の山で見たしゃくなげの紅い花のようで、とても美しかった。

「婢やアお嬢ちゃんおんぶしておくれッ！」
奥さんの声がしている。

あゝあの百合子という子供は私には苦手だ。よく泣くし、先生に似ていて、神経が細くて全く火の玉を背負っているような感じである。——せめてこうして便所にはいつている時だけが、私の体のような気がする。
(バナ、に鰻、豚カツに蜜柑、思いきりこんなものが

食べてみたいなア。」

気持ちが悪しくなってくると、私は妙に落書きをたくさんなってくる。豚カツにバナナ、私は指で壁に書いてみた。

夕飯の支度の出来るまで赤ん坊をおぶって廊下を何度も行ったり来たりしている。秋江氏の家へ来て、今日で一週間あまりだけけれど、先の目標もなさそうである。この先生は、日に幾度も梯子段を上ったり降りたりしている。まるで廿日俵のような。あの神経には全くやりきれない。

「チャンチンコイチャン！ よく眠ったかい！」
私の肩を覗いては、先生は安心をしたようにじんじんばしよりをして二階へ上って行く。

私は廊下の本箱から、今日はチェーホフを引っぱり出して読んだ。チェーホフは心の古里だ。チェーホフの吐息は、姿は、みな生きて、黄昏の私の心に、何かブツブツものを言いかけて来る。柔かい本の手ざわり、この先生の小説を読んでいると、もう一度チェーホフを読んでもいいのと思った。京都のお女郎さんの話なんか、私には縁遠い世界だ。

夜。

家政婦のお菊さんが、台所で美味しそうな五目寿司を拵えているのを見てとても嬉しくなった。

赤ん坊を風呂に入れて、ひとしずまりすると、もう十一時である。私は赤ん坊というものが大嫌いなだけけれど、不思議な事に、赤ん坊は私の背中におぶさると、すぐウトウトと眠ってしまったて、家の人達が珍らしがっている。

お陰で本が読めること——。年を取って子供が出来ると、仕事も手につかない程心配になるのかも知れない。反感がおきる程、先生が赤ん坊にハラハラしているのを見ると、女中なんて一生するものではないと思つた。

うまい、やしいにだつて、可憐な白い花が咲くつて事を、先生は知らないのかしら……。奥さんは野そだちな人だけれど、眠つたようなひとで、この家では私は一番好きなひとである。

(十二月×日)

ひまが出るなり。

別に行くところもない。大きな風呂敷包みを持って、汽車道の上に架った陸橋の上で、貰った紙包みを開いて見たら、たった二円はいつていた。二週間あまりも居て、金二円也。足の先から、冷たい血があがるような思いだった。——ブラブラ大きな風呂敷包みをさげて歩いてみると、何だかザラザラした気持ちで、何もかも投げ出したくなってきた。通りすがりに着いた瓦葺きの文化住宅の貸家があったので這入ってみる。庭が広くて、ガラス窓が十二月の風に磨いたように冷たく光っていた。

疲れて眠たくなっていたので、休んで行きたい気持ちなり。勝手口を開けてみると、錆びた罐詰のかんからがゴロゴロ散らかっている、座敷の畳が泥で汚れていた。昼間の空家は淋しいものだ。薄い人の影がそこにもこゝにもたゞずんでいるようで、寒さがしみじみとこたえて来る。どこへ行こうというあてもないのだ。二円ではどうにもならない。はぐかりから出て来ると、荒れ果てた縁側のそばへ狐のような目をした犬がじっと見ていた。

「何でもないんだ、何でもありゃしないんだよ。」

言いきかせるつもりで、私は縁側の上へ屹とつたつていた。

(どうしようかなア……、どうにもならないじゃないのッ！)

夜。

新宿の旭町の本質宿へ泊った。石崖の下の雪どけで、道が館このようにこねこねしている通りの旅人宿に、一泊三十銭で私は泥のような体を横えることが出来た。三畳の部屋に豆ランプのついた、まるで明治時代の代にだってありはしないような部屋の中に、明日の日の約束されていない私は、私を捨てた島の男へ、たよりにもならない長い手紙を書いてみた。

みんな嘘っぱちばかりの世界だった

甲州行きの終列車が頭の上を走ってゆく
百貨店の屋上のように寥々とした全生活を振り捨
て、

私は本質宿の布団に静脈を延ばしている
列車にフンサイされた死骸を